

## 映画／テレビドラマでリスニング： 英語選択 LL (初級) の場合

黒坂尚子

### 0. はじめに

本学で‘英語選択 LL (初級)’を担当して5年になる。その間、授業の内容、やり方、評価などを一任され、担当者は全く自由に、そしてかなり楽しんでやらせていただいている。毎年新学期と共に私の毎日はこの授業中心に回り始め、常に緊張を強いられることになるが、それを苦には思わない。幸い授業は順調に進み、ひとつの方向も確立されてきた。がいつの頃からか、その方向では解決できない部分があることも、表面にはでないものの、担当者自身ひそかに感じる様にもなった。そこでそれも合わせて、5年で一区切りついた今、この授業について話してみたい。それにより、当たり前になってしまった授業のやり方も、そもそもどういう目的で始めたことだったのか自分自身に明らかにし、どんな成果があったのかを第三者の方々に知っていただき、また今後の課題についても考えたい。もとより、何らかの学問的理論に裏づけされたやり方ではない。が一方、英語のトレーニングをするのにこれがベスト、これぞ唯一無二、という方法など存在し得ない。おそらくどの先生も試行錯誤、満足と失望を繰り返しながら授業を進めておられるのだろう。であれば、こういう授業もあっていいのでは、とは思う。

## 1. ‘英語選択 LL (初級)’ の教室と定員

‘英語選択 LL’は上級、中級、初級とあり、全学部、全学年、全クラスにオープン。学生は誰でも履修できる。私が持たせていただいているのは、初級 3 クラスである。3 クラスとも教室は LLB を使用。ここは CALL 教室で、学生はマスター卓から送られる音声教材をブースのパソコンに録音する。この音声はパソコンを通して、同時にブースの MD デッキあるいはカセットデッキにも送られる。学生は授業中はパソコンから音声を再生して聞いているが、授業が終わるとデッキから録音した自分の MD あるいはカセットを出して持ち帰る。(一部 CD に焼き付ける学生もいる)。テキストを使わないこのクラスでは、これがテキスト代わりである。この授業は LL 教室を使う必要はあるが、CALL 教室でなくてもよい。ただ LL 教室の中ではこの B 教室が一番収容人数が多いので、ここを使っている。

1 クラスの定員は LLB のブースの数と同じ 64。毎年 3 クラスとも希望者が定員をかなり超えるので、1 週目は抽選を行って、各クラス定員いっぱい 64 人の履修者を決めるのが恒例になっている。

## 2. このクラスの教材、それに目的と出発点

3 クラスの内、‘映画でリスニング’と名前がついている映画クラスが 2 つ。それに‘テレビドラマでリスニング’という名前のドラマクラスが後から 1 つ、加わった。これでおわりの通り、この授業の教材は映画とドラマである。それも学習用に作られた教材ではない。一般に劇場公開され、ビデオや DVD で販売され、家庭のテレビで放映される、普通の映画やドラマだ。なぜこれらが教材なのか。——この授業はリスニングのトレーニングを目的としているが、それを内容を聞き取るトレーニングと、音を聞

き取るトレーニングの両面から行っている。そのどちらのトレーニングにも理想的な出発点を用意されているのが、映画やドラマだからだ。その出発点とは何か。—— ‘登場人物のしゃべっているせりふが、意味を持ったことばとしては耳に入ってこない状況’ であり、‘それが意味をもたない雑音として、耳のそばを通り過ぎていく状況’ である。

映画やドラマを授業に取り入れるのは目新しいことではないだろう。‘映画に描かれたアメリカ社会’、‘ドラマに見るアメリカの家庭’ などのテーマで授業ができるだろうし、英米の文学作品は多く映画化されているから、それらを文字と映像の両方から鑑賞する授業もあるだろう。また最近では映画のシナリオをテキストにして、あの憧れのスターがしゃべったあのせりふをしゃべってみよう、という、学生が聞いたらわくわくするような会話の授業もできるらしい。この授業の目的は映画やドラマの作品そのものの鑑賞ではなく、それを教材にした英語のリスニングのトレーニングだが、結果的にはその都度取り上げた作品を、学生も私もその目的が何であったか忘れるほど楽しんでしまう。

ご参考までにこの 5 年間に取り上げた映画およびテレビドラマは以下の通りである。

映画クラス：

- 1999 年度 前期 *Hercules* (Walt Disney Pictures)
- 後期 *Anastasia* (Twentieth Century Fox)
- 2000 年度 前期 *Mulan* (Walt Disney Pictures)
- 後期 *Mrs. Doubtfire* (Twentieth Century Film)
- 2001 年度 前期 *Tarzan* (Walt Disney Pictures)
- 後期 *Rain Man* (United Artists Pictures)
- 2002 年度 前期 *The Lion King* (Walt Disney Pictures)

- 後期 *The Legend of 1900* (Fine Line Pictures /Medusa  
Film Production)
- 2003 年度 前期 *Monsters Inc.* (Walt Disney Pictures)
- 後期 *What's Eating Gilbert Grape* (Paramount Pictures)

ドラマクラス (2003 年度～) :

- 2003 年度 前期 *Bewitched* (日本語タイトル‘奥さまは魔女’)  
(Columbia Pictures)
- 後期 *Ally McBeal* (日本語タイトル‘アリー・マイ・ラブ’)  
(Twentieth Century Fox)

### 3. 毎年 1 本はディズニーアニメーション、のわけ

これをご覧になってお気づきと思うが、毎年ディズニーの長編アニメーションを取り上げている。私は以前はクラス単位の必修の授業でディズニー作品を使っていたが、この‘英語選択 LL’が始まってからは、ここでだけ使っている。ディズニーがピクサーアニメーションスタジオと共同製作した CG によるアニメーションは、2003 年度の *Monsters Inc.* が初めてだったが、今回は数々の記録をぬり替え、長編アニメーション部門でアカデミー賞を受賞した *Finding Nemo* を予定している。年間で取り上げる作品は前期後期 1 本ずつなので、もう 1 本はアニメーションでない‘普通の’作品にしているが、それにしてもなぜ毎年ディズニーなのか。——英語がやさしいから。学生も日本語吹き替え版や字幕版を劇場で見たり、ビデオを持っていることも多いだろうからとつきやすい。何より私自身が大好き。というのが最初の理由だったが、実際に教材という目で見てみると新たな発見があった。

まず‘ディズニーは英語がやさしい’、という誤解。確かに 70 年以上前に作られた長編アニメーション第 1 作目である *Snow White* などはせりふの量も少ないし、50 年代の *Sleeping Beauty* は最近出た DVD を見て、その画面の緻密さ、美しさに息を呑んだと共に、せりふも母親が子供を寝かすつけるときに読む‘おはなし’の様にやさしく、作品自体が 1 冊の絵本になっていた。ところが 80 年代後半の *The Little Mermaid* 以降の作品について‘ディズニーの英語はやさしいか’と問われると、答えは“yes and no”である。なるほど主役が話すせりふは語彙もやさしく、スピードも速すぎず、子供が聞いても理解でき、これだけ追っていけばストーリーはちゃんとわかる様になっている。しかしこれが脇役となると違ってくる。すごい早口で喋りまくる者もいれば、むずかしい理屈を並べたてる者もいる。お笑いコンビが交わすジョークや言葉遊びはなかなか高度である。このあたりは子供と一緒に見ている大人が楽しんでいるだろう様子が目に浮かび、色々なレベルで同時に楽しめるところが実にうまくできている。これを私の授業で使う場合には、後で紹介するようにやさしい部分で内容を聞き取り、むずかしい部分は音を聞き取るトレーニングに当てることができるので、都合がよい。

さてこのやさしい部分のせりふだが、これはやさしいというより、不要なものは一切そぎ落とし、エッセンスだけになっているといった方がよい。ことばそのものは少なく、簡単だが、そこには溢れんばかりの感情が込められている。その感情をことばから引き出し、表現するのが声優である。せりふを生かすも殺すも声優によるところが大きい。その点ディズニー作品の声優は、自分に求められている以上の役割を果たしてしまう。これは彼らがもともと実力があるからに違いないのだが、またディズニーアニメーションの製作過程にも関係があるのではないだろうか。この過程が声優の力をより発揮させる結果になっていると思う。

ディズニーアニメーションの場合、描き上がった絵に声優がせりふをつけていくのではない。台本ができると初めに声優がせりふを吹き込み、画面なしのラジオドラマの様なものを作り、それを聞いたアニメーターがイメージを膨らませて絵を描いていく。声優は画面の表情が楽しそうだから笑っているのではない。この段階では画面も何もないのである。自分が受け持つ人物の顔もわからないのだ。それを想像で作り上げ、声ひとつで聞いている私達にその時々感情を伝え、表情を見せてくれる。私自身授業の予習をする時、ビデオや DVD の音声だけを録音してもらったテープを聞く事がある。すると驚くのは音声だけで目の前に画面が広がり、人物の表情が見えてくるのだ。声優陣の想像力と表現力に脱帽と言う他はない。ディズニーのアニメーションというとすぐにかわいらしいキャラクターが思い浮かぶが、実は絵がつく前の段階で既に優れたせりふ劇として成立している。卓越した声優陣が聞かせてくれることばの美しさ、そこに込められた感情、豊かな表現力はぜひ学生に伝えたい。少々長くなったが、このクラスで毎年 1 本ディズニー作品を見ているのは、以上述べた様なせりふの多様性と質の高さによるところが大きい。

#### 4. ‘聞き取り’ で内容を理解させるには —その 1—

さて話を戻すと、この授業でのリスニングのトレーニングは、内容の聞き取りと音の聞き取りの 2 本立て。前者を ‘聞き取り’ と呼び、後者を ‘書き取り’ と呼んでいる。共にその出発点は、‘登場人物のしゃべっているせりふが、意味を持ったことばとしては耳に入っていない状況’ である。ここからどうやって内容、つまりせりふ、そして物語を理解させるか。——便利で手に入りやすいのが DVD。これを使えば日本語の吹き替えを聞くことも、日本語字幕を見ることも、以前はクローズドキャプションになっ

ているビデオのキャプションを出してしか見ることができなかった英語字幕を見ることが出来る。英語字幕を使う学習法は最近注目されている様だが、この授業ではやらない。一瞬のうちに次へ行ってしまう字幕の流れに学生がついていけないのでは？字幕に目を走らせただけで理解できるだろうか？という不安もある。(勿論字幕を使う学習法の目的の1つが、その速読のトレーニングなのだが)。が何より、学生には画面から見て取ってほしいことが他にある。それは人物の表情や動きであり、その場の雰囲気である。字幕を見ればそちらに神経が集中し、画面から目で得られる情報を見逃してしまうのが怖い。

しかしそれでは問題は解決されないままである。吹き替えにもせず、字幕も見せずにどうやって内容を理解させるか。——この授業ではシーンを短く区切り、そこからせりふを全部ではないが抜き出して、私が口頭で再現し、学生に聞かせるという方法を取っている。ヒントを得たのは、普段私達が見る映画のビデオとは別に、映画の音声だけをネイティブスピーカーが聞き取りやすく録音しなおした、学習用のリスニングテープである。ではこのテープそのものを使えばよさそうだが、これはどの映画にも付いている訳ではないし、こちらが再現するのであれば学生の反応を見ながらスピードを落とすことも、繰り返すことも、これは無理と思えば意味を変えずに他の言い方に変えることもできる。むずかしい単語は前もってホワイトボードに書くか、モニターに出しておく。そしてこちらで再現した英語のせりふは、その場で学生に日本語に‘通訳’させる。

## 5. 学生の苦難

耳から英語を入れて口から日本語で出す。この‘通訳’が学生は苦手だった。英語そのものは、わかってみれば学生自身が拍子抜けするほどやさし

いのだが。先ず順番が回ってきた学生に向かって私がせりふを言うと、大急ぎでノートに筆記し、筆記し終わってから改めてそれを読んで和訳しようとする。これに対しては、授業でやったことは全て試験の範囲に入るので記録をとっておく必要はあるが、書くのは自分が‘通訳’した後にすること、というルールにした。学生としては、先ず書いて文字にしてみないと不安だったのだろう。

私はせりふを言うときは全体のスピードは落とすが、音が固まって発音されるところはそのまま発音する。すると中学時代に覚えた単語とおなじみの前置詞がくっついているだけにもかかわらず、その音のかたまりが聞き取れない。よく知っている単語のはずなのに、発音を聞いてそれと認識できない。

全部の音が自分なりに聞き取れると、書くことが禁じられているので口の中で文を数回繰り返して、さてこの意味は？と考える。今度は1つの単語に引っかかる。知っている単語だが意味が思い出せない。実はそれがわかったところで文全体の意味は変わらない。それがわからなかったところで文全体の意味を理解するのに支障はない。支障がある単語や語句は前もって書き出してある。が1箇所でもひっかかるとそこを飛ばせずにこだわるので、文全体の意味がとらえられない。文全体を1つの意味としてとらえることができない。

音も聞き取れた。意味も理解した。最後にそれを日本語で言う段階になってなかなか口が開けられず、本人も試みるのだが口ごもってしまう学生がいる。これは頭に入れた内容を日本語としてまとめられないのだ。勿論学生には本物の吹き替えか字幕の様な、いかにもせりふらしい日本語を求めている訳ではない。多少おかしくてもいわゆる直訳でも、とにかく口に出す様に言っている。それでも長い時間をかけないと日本語をまとめられない学生がいる。



## 6. ‘聞き取り’で内容を理解させるには —その2—

初めにこの授業は‘登場人物がしゃべっているせりふが意味を持ったことばとしては耳に入っていない状況’を出発点とする、と言った。この状況から学生に内容を理解させる1つの手段として、せりふを口頭で再現して聞かせているのだが、もう1つの手段はせりふを全身で聞き取る様に仕向ける、ということである。私達は日本語でも誰かがしゃべっているのを聞く場合、相手のことばだけを聞いているのではない。先ず相手の表情を見る。声の調子、雰囲気を感じる。話の中から無意識にいくつかのことばを拾い出し、それらをつなげて‘この人はこんなことを言っているのだろう’と想像する。同時に‘この人は次にこんなことを言うはずだ’と予測してみる。また‘口ではこう言っているけれども本当はこう言いたいのではないか’と勘を働かせることもある。そしてしゃべっている相手の気持ちを思いやる。‘この人は今どんな気持ちだろうか’と。それがわかった時、相手の言いたいことは既に半分以上聞き取れている。この様に私達は耳だけでなく目や頭を使い、想像力や推理力を働かせ、感情を動かし、全身で相手のことばを理解しているのである。このことは英語を聞き取る際に大いに役立つ。ところが学生は日本語においてさえもこれに慣れていない。また大学に入ってくるまでに受けた英語の授業でもその経験がない。耳だけ使っていれば十分理解できる英語を聞いていたのだろうか。だから英語を聞く時、耳を補うべく目、頭を使う、想像力や推理力を働かせる、相手の気持ちになると言ってもどうすればよいのかわからない。そこで授業中はせりふの‘通訳’と同時に学生には具体的な質問を浴びせていく。‘彼の様子は?’ ‘彼女の反応は?’ ‘どんな表情だった?’ ‘そこから逆にせりふを推測してみて。’ ‘次に彼はどうすると思う? 予測して。’ ‘彼女はどんな気持ちでこのせりふを口にした? 彼女の気持ちを言って。’ ‘彼が本当に言いたかつ

たことは別にあったのでは？ 想像してみてください。’

ところが学生は‘通訳’にも難儀するが、こういった質問にも戸惑う。目で見ることは得意だろうと、登場人物がある小道具を手にして現れた時に‘これは何だろう。これで何をするつもりだろう’と問いかける。実際目にするのは初めてだが、しばらく前のシーンで私達はこの小道具についてせりふで情報を得ている。にもかかわらず答えがなかなか出ない。前のシーンを覚えていないのではない。せりふの内容もその時に確認済みである。が学生にとってそれはその場限りのことであって、今見ているシーンと結びつけられないのだ。登場人物の気持ちになれというのもむずかしいらしい。それができればせりふを聞く前から内容の見当がつかののだが。また彼や彼女の気持ちになれても、それを日本語で表現するのが下手である。中には単語をぼつりぼつりと並べるだけの学生もいて気にかかる。‘通訳’の時と同じで、短い時間で日本語をまとめることができない。

## 7. 学生の成長

この様にこちらとしては色々手段を講じるのだが‘聞き取り’はなかなか進まず、教室全体が凍り付いてしまうこともしばしばだ。しかしこれを毎週根気強く繰り返していくうちに、学生の様子が変わってくる。LL 教室は前方のホワイトボードを覆う様に天井から大きなスクリーンが下りる。また2人がけのブースの中央にモニターが1台セットしてある。音声は天井のルームスピーカーからでも、ブースに1人1つずつついているヘッドセットからでも聞ける。気がつくと学生はブースの左右から争うようにモニターに身を乗り出している。ひとつとして見逃すまい、聞き逃すまいとしているのだ。聞こえるものを聞くという受身の姿勢ではなく、自分から聞きにいこうという積極的な姿勢である。

LL 教室では先生はマスター卓に座ったままヘッドセットで学生と会話できるが、そうするとブースのパソコンとモニターに阻まれて、お互いに相手の表情は全く見えない。ブース番号が若いうちはいいが、64 番はまず無理である。そこで私は‘聞き取り’の時はマスター卓を離れ、学生の中へ入っていく。彼らがパソコンに音声を録音し保存し、一通り聞き返した頃を見計らって、席の間を移動しながら今見たシーン、今聞いたせりふを聞き起こさせていく。通訳させながら、感情移入させながら。すると 1 人 1 人が、どんなせりふが自分に回ってくるのか全身耳にしているのが伝わってくる。その意気が前から後ろから突き刺さってきて怖いほどだ。すごい集中力にたじたじとなる。私はどんな質問にもすばやい反応を求めるので、しばらく待って答えが出ないとすぐ次へ行ってしまう。学生も次第にこの速さに慣らされてくるが、それでも答えられないと何とも悔しそうな、悲しそうな表情をする。同じ質問に隣の学生がさっと答えてしまう時はなおさらだ。それを見て彼らの真剣さにこちらが心打たれる。

ここまでくるとしめたもので、授業は俄然やりやすくなってくる。この頃季節は既に秋。4 月に 64 人でスタートした 1 クラスの人数は前期 3 ヶ月、前期試験、夏休みを経て後期に入り、ようやく 50 人台。文化祭を過ぎると 50 人を割ることもあるが、そこで止まる。この時期まで残った学生は学期末に 2 時間続きの補講をやっても出てくるし、‘この授業の単位は余剰で必要ないのだが…’と言いつつ欠かさず出席する。学年末まで私は 1 回授業が終わるたびに、映画の残り時間を授業の回数で割っては青ざめているが（ドラマは 1 本が 30 分か 45 分なのでどこでも切りやすく、少なくともその点では気が楽）、そんな学生に励まされ、最後まで引っ張ってもらっている。

## 8. ‘聞き取り’の完成

当初学生はせりふの‘通訳’が苦手だった。せりふ一区切りの内容を瞬時にとらえて日本語で表現するのがむずかしかった。が慣れてくると結構スムーズにこなすようになってくるばかりか、楽しむ者も出てくる。自分で映画の吹き替えをやっているか、字幕をつけている気分になるらしく、せりふのエッセンスをぱっとつかんで簡潔に言い表す。と思えば逆にエッセンスだけではニュアンスが出ないと、ていねいに日本語に直す。どんな場合も内容自体が間違っていない限り私は OK を出すし、‘今のはうまい!’と思えばそう言う。

ある作品で主役の男性と今までの恋人、それに新しい恋人の 3 人がはちあわせし、しばらく会話が続いた後に新しい恋人が一言、“Good.” とつぶやいて終わるシーンがあった。この一言をどう日本語にするかは新しい恋人の気持ちをどう解釈するかで違って来るが、何人かで意見が分かれた。なぜか女子学生がこだわっていた。授業では勿論使わなかったが、この作品には日本語字幕付きのビデオも DVD もあるので、そこではどうなっていたのだろう。ここまで来ると学生もそれを知らうとかそれに頼ろうとか思わなかったし（私は見たかった）、仮に字幕がわかったところで彼らは‘それはおかしい’、‘いや違う’、と言い出したのではないかと思う。

‘通訳’と共に学生を悩ませたのが、せりふを目、頭、心で聞き取ること。最初は戸惑っていたがこれも慣れるというより、今までは流れていくのをぼんやりと見送っていた画面やせりふを、こちらからつかまえに行くという姿勢が身についてくると楽になる。私が彼らに登場人物の気持ちに入っていくってごらんとするのは、そうすることがその人物のせりふを理解する早道だからだが、これを積み重ねていくと物語そのものへの感動につながる。これは大切なことだと思う。学生は教材とはいえ、映画やドラマを見

ている以上、やはり感動したいのだ。せりふを表面的に解釈しているだけではそれはできない。

先程あげた作品の別のシーンで、母親が一晩家を空けて翌朝帰った息子の顔を見るなり、“Why did you come back?”と言う。この一家では父親が自殺した後、そのショックで母親は家に引きこもってしまい、下の息子は生まれつき知的障害である。他に娘も 2 人いて、そんな家族の面倒を長いこと一身に背負ってきた上の息子がある晩ついに‘きれて’しまい、発作的に家を飛び出したものの、やはり家族を捨てられず、次の朝戻ってきたところへ母親が浴びせたのがこのせりふである。これを聞いて息子は困惑する。‘なぜ戻ってきたって？ 二度と自分の顔は見たくないということか？ そんなに怒っているのか？’——しかし、母親の気持ちはもっと深いところにあった。最終回近くに出てきたこのせりふについて、私から学生に‘ここに込められた母親の気持ちは？’と聞く必要はなかった。順番が回ってきた学生は次々に彼女の気持ちを代弁した。そして感動していた。‘何だってお前は今頃戻ってきたりして。そんなことをしたらまた苦しい毎日が待っているだけじゃないか。いいんだよお前は出て行って。親も兄弟も捨てておいき。誰のものでもない、お前の人生じゃないか。好きに生きていいんだよ。お前はこの家を出て自由におなり。なのにはばかだね、戻ってくるなんて。’

こうしてやっとのことでラストシーンまでたどり着いてエンドマークが出ると、私はへなへたと崩れ落ちそうな気分になるが、学生は満足感を覚えるらしい。自分は日本語の吹き替えも聞かず、字幕も見ずに、映画のせりふを始めから終わりまで英語で理解し、英語で感動したのだ、と。が実はこれは錯覚である。学生は英語のせりふを聞いてはいるが、それを色々手を尽くして理解するところまでもっていったのは先生の手引きであり、自分だけの力ではない。見終わって感動したのも、そうなる様に人物や物

語に感情移入させられていったのである。それを学生は自分で、と錯覚する。しかし、私はこの段階ではそれでいいと思っている。ここで自分はやったという達成感を持つことは意味があり、それがあれば次のチャレンジへつながる。

ところで、ここまで来て今さらこんなことを言い出すのも、という気もするが、このクラスでの‘聞き取り’——くどい様だが映画／ドラマのせりふをこちらで口頭で再現して学生に聞かせるという、このあまりに‘原始的’なやり方にあきれた方も多いのではないだろうか。実は誰よりもあきれているのが、そう言っている担当者自身なのだ。1回90分の授業では、その日見るシーンのせりふ全部を取り上げている時間的余裕はない。また必ずしもそうしなくてよい。そこで私はビデオを見て、ビデオの音声を録音したテープを聞き、シナリオがある場合にはそれも参考にして、取り上げる必要ありと思われるせりふを拾い出し、私専用の授業用の台本を毎回作ることになる。文字通り‘手作り’である。我ながら好きでないとしても続けられないと思うが、好きだからそれはいいとして、そもそも最新設備の整ったLL教室で、音声も字幕も自由に選べるDVDも使い放題で、なぜこのようなやり方で授業を進めているのだろう。正直言って新学期が来るたび、‘今度こそ’と思う。‘今度こそDVDで、日本語でも英語でも、とにかく字幕を見せてしまおう。’——しかし結局いまだにそれが果たせないでいる理由は学生にある。

学生の中には、授業で使っている作品のビデオやDVDを買って家で見ている者がいる。その彼らが、‘今日取り上げるシーンを前もって字幕付きで見てきたのに、教室で字幕なしで見せられたら、登場人物が何をしゃべっているのかやはりわからない’と言う。これは彼らが字幕を読んで、そのシーンのあらすじを頭に入れているのであって、せりふそのものを聞き取っているのではないからだろう。一方、字幕に代えて私が口頭で再現し

たせりふを 1 度耳に入れた後で再度同じシーンを見ると、今度はせりふそのものが聞き取れる、らしい。少なくとも聞き取れた、気になっている。とするとこの‘原始的’なやり方にも何らかの価値があるのだろうか。1 年間の授業が終わると多くの学生が、‘せりふを英語のまま聞き取る面白さがわかりました’と言う。そんなに簡単にわかるのか、ということはあるにしても、学生にこう言わせるのに、もしかするとこのやり方も少しは貢献しているのかもしれない。私自身は‘もう沢山’と思いつつ、せりふを聞き取れた時の学生の嬉しそうな表情を見ると、‘字幕を出します’とは言い出せず今まで来てしまった、というのが本当のところである。

## 9. 次は‘書き取り’で音を聞き取る

ここまで話してきた授業の進め方は、映画やドラマの内容を聞き取るのが目的で、私達は‘聞き取り’と呼んでいる。せりふを口頭で再現して聞かせるのも、耳だけでなく目で頭で心で聞く様に仕向けるのも、内容を理解させる為だ。ところがこれでは、映画やドラマのせりふの音そのものの聞き取りとしては不十分である。勿論学生は取り上げるシーンの音声は全てパソコンに録音し、授業中はこれを聞き、自習用には MD あるいはカセットを持ち帰っている。持ち帰った後は授業の内容を忘れないうちに、時間の許す限り何回も聞き返すように言っているが、果たしてどれくらいの学生が実行しているだろうか。ただ学期末試験の際は自分達に合わせて再現されたせりふではなく、俳優がしゃべっているそのままのせりふが流れてそこから問題が出されるので、少なくとも試験前はテープを聞いているはずである。がいずれにしろ、‘聞き取り’で内容を聞き取っただけでは片手落ちで、音そのものを聞き取るトレーニングが同時に必要になる。これを私達は‘書き取り’と呼んでいる。‘書き取り’も英語を聞くことに違いは

ないが、そこから何を聞くかが‘聞き取り’とは違う。‘聞き取り’は内容を聞く。‘書き取り’は音を聞く。聞いた音を文字で書き取るので‘書き取り’と呼ぶ。この‘書き取り’もやはり‘聞き取り’と同じく、‘登場人物のしゃべっているせりふが、意味を持ったことばとしては耳に入っていない状況’を出発点とする。

## 10. ‘書き取り’はどこを、どれくらい、どうやるか（第1段階）

1 本の映画あるいはドラマの中でどこを書き取らせるか選ぶなら、なるべくせりふが機関銃の様に発せられている所、シャワーの様に浴びせられている所がよい。1 回流しただけでは何が何だかわからず、録音して数回聞くと単語が飛び飛びに拾えるという所。ただし学生は受験勉強中はずっと複雑な構文と格闘していたのだし、現在でも購読の授業ではもっと難解な英文を日本語に訳しているのだ。それと比べれば‘書き取り’部分の英語自体は決してむずかしくはない。これは学生自身が後で発見して一様に驚く。またこの部分は最終的には学生の発音のモデルにもしたいので、それにふさわしい所であってほしい。スピードは速くても発音は正しく明瞭で、しかも感情表現が豊かなせりふは理想的。反対にスピードはゆっくりだが、ぼそぼそと無表情なせりふは避けたい。

ではこれを 1 回につきどれくらい書き取らせるかという、時間にして短くて 2 分、大抵は 3 分台から 4 分台、5 分は超えない様にする。これでもせりふの量はかなりのものだ。そこでシーンが切れる場合はシーン 1 つ。短いシーンが 2 つのこともあれば、長いシーンを強引に途中で終わらせることもある。‘聞き取り’と同様、音声は学生のパソコンに、さらに MD あるいはカセットに録音させる。この‘書き取り’作業は授業時間内にやることはなく、翌週までの宿題になる。



宿題のやり方は至って簡単。学生には音声を再生し、‘一字一句’書き起こす様に言う。しかし彼らは実際にそうしようとして途方にくれる。せりふのスピードについていけないというより、音が団子状態になってつながって耳に入ってくるので、それが果たして自分の知らない何か1つの単語なのか、それとも知っている単語がいくつかくっついていてのかわからず、ひどい時はそれがしばらく続いて、どこが文の切れ目なのかもはっきりしない。‘一字一句’と言われてもどこか‘一字一句’なのだろう。——まさにここが彼らの出発点である。そしてこの耳に入ってくる意味を持たない音のかたまりを、自分がすでに知っている意味を持つ英語の文字にする。音から文字へ。‘一字一句’書き起こせ、とはそういうことであり、それがこの授業の‘書き取り’である。‘書き取り’部分の語彙、文法、構文のほとんどは学生が大学入学までに学んだものだ。だから学生にはわからない音のかたまりにぶつかったら今までの知識を総動員し、音と知識を結びつけて文字にする様に言う。

‘書き取り’に忙しいのは学生だけではない。私もその‘正解’を準備しなければならない。最近映画のシナリオも多く市販されている。これらは主に自習用なので、丁寧な日本語の解説がついていたりする。細かい部分で実際に俳優がしゃべっているせりふと一致しないこともあるが、大体においてよくできている。ただ膨大な映画の本数からすれば、こうしたシナリオが出ているのは多いと言ってもごく一部である。授業で取り上げる作品のシナリオが手に入ればありがたいが、逆にシナリオが手に入るという理由だけでその作品を取り上げる気にはなれない。先に‘聞き取り’の所で述べた様に DVD は便利だが、字幕は日本語だけで英語字幕は入っていないものもある。シナリオや DVD に助けてもらえれば嬉しいが、できない場合はせりふの音声のカセットテープにとってもらい、自分の耳だけを頼りにひたすら‘一字一句’書き起こしていく。先生の準備も大変なのだ。

## 11. ‘書き取り’の第2段階—その1—

1 週間後、学生は各自宿題を持ってくる。教室では‘正解’をブースのモニターに出し、学生はそれを見ながら、ついでに私の説明も聞きながら、自分の手で自分が書き取ったせりふを赤ペンで直していく。学生が‘書き取り’をやるのが第1段階だとすれば、この‘答え合わせ’（と私達は呼んでいる）は第2段階になるが、私はここをかなり重要に考えている。ここで学生は1人1人、英語の音について色々新しい発見をするからだ。すぐに思いつく具体例をいくつか挙げてみると――

私は書き取る時は“a”も“the”も落とさない様にとわざと指示するのだが、実際には学生は“a”も“the”も落としてくる。それはこれらが文の中では普通速く弱く発音されるから当然なのだが、学生はこれを聞き落としてみて自分で発見する。“Her”, “him”なども頭の“h”が消える為、直前の単語とくっつけて別の単語を作ってくる。文末の“it”はまず落とすと思って間違いない。学生に“it”で終わる文を読ませると、特別な意味もないのにここを強調して、あるいは他と同じ強さで読んでしまうことが多い。それが“it”を自分が聞き落としたことで、初めて文末の“it”は弱く、または直前の単語につけて発音されるべきなのだ、と誰に言われることなく自分で発見する。2, 3個の単語からなる慣用句は中学時代から暗記しているはずなのに、全部つなげて奇妙な1つの単語を考え出す。聞きなれない単語を耳にしたので何だろうと思って答えを見ると、自分がしょっちゅう使っているカタカナ英語だったりする。

学生は‘答え合わせ’の時に自分の間違いを発見し、それが目で文字を見ていたら間違えるはずのない初歩的なものであればあるほど、ショックを受けるらしい。訂正は自分の手をするのだが、その横に小さく‘恥ずかしいです’と書き添える者もいる。しかし学生にこういう発見をさせること

こそ、この‘書き取り’の第2段階のねらいであり、だからここはどうしても自分で訂正させる必要がある。それも書き取った後、なるべく時間をおかずにやりたい。学生が‘あれほど考えてもわからなかったここはこういうことだったのか’と実感できなければ意味がない。

一方中にはそれまで知らなかった単語（この場合はいくつかの音のかたまりを1つの単語と聞き取ったのではなく、前後関係から本当に1つの単語）を、耳に入ってくる音を頼りに辞書で見つけてくる者もいる。これは今まで彼／彼女が英語を習ってきた順序である文字から音へ、の逆を行く音から文字へ、であり、この逆の順序を私は‘書き取り’で学生に体験させたかった。意味を持たない‘雑音’が意味を持つ‘ことば’に変わる瞬間を味わわせたかった。それには録音した部分を全文書き起こすという方法以外考えつかなかったし、このLL教室で、映画／ドラマを教材に使ってなら実現できると思った。

## 12. ‘書き取り’の第2段階—その2—

‘答え合わせ’が終わった‘書き取り’はそのまま提出。どれも訂正と、私が口で言ったりボードに書いた説明の書き込みで真っ赤になっている。‘書き取り’は3クラスともやっているが、1度に集めるのが1クラス分としても約60。これは壮観である。私はこの訂正後の‘書き取り’を見るたびに感動を覚える。中には間違ったところだけ訂正したというより、始めから終わりまで私が出した‘正解’を写したといった方がいい位、自分の元の答えの痕跡が残っていないものもある。授業での‘答え合わせ’は長いと1時間休みなしで続くから、学生にも持久力が要求される。今時の学生が見せるこの頑張りには正直感心する。

私は学生が提出した‘書き取り’には全て目を通してから返却するが、そ

の時本人に直接口頭でコメントする様にしている。‘感心した’ 場合はその通り伝える。自分で力を尽くして書き取ろうとしたなら、その結果が真っ赤に訂正されても恥ずかしがることはないのだ、と。反対に自分でやったことといえば、音声を流してそこから聞き取れる単語を拾っていただけで、この‘書き取り’の目的である音を文字にするという努力は一切していない、という場合は私のサインはつけない。宿題をやったとは認められない、の意味である。この返却の時点で、‘書き取り’の第2段階である‘答え合わせ’は終わる。‘書き取り’には点数はつかないが、期末試験の成績と共に学年評価の一部になっている。

### 13. ‘書き取り’の第3、第4段階

学生には返却された‘書き取り’は清書する様すすめている。清書ができ上がってからが第3段階である。が第1、第2段階と違って、第3段階に私自身がかわることはない。授業中にやる時間的余裕がないことと、学生1人1人の学力、それ以上に意欲にあまりに差があるこのクラスでは、何らかの目標をかかげてそれに向かって全員を統一できるのは、精一杯引っ張って第2段階まで。それ以上は無理である。従って以下はクラス全体の統一目標ではなく、個々の学生の努力目標であり、私はそれが達成できているか確かめることはしない。即ち、‘清書ができ上がったら、録音した音声を流しながら目で文字を追い、音と文字を確認すること。確認したら何度も繰り返して聞き、スピードやリズム、イントネーションを自分の耳に覚えさせること。’‘書き取り’はそのまま期末試験の問題になるから、学生もここまでは目標に向かって努力していると思う。少なくとも自分の耳に何度も聞かせるはずである。その耳が発音その他をちゃんと覚えたかどうかは別にしても。

では第 4 段階は、という設定していないが、もうお察しであろう。この‘書き取り’部分を今度は自分で発音してみる、読んでみる。さらに音声だけ流してシャドウイングしてみる。この段階はこれまで実現したことがないし、これからもこのクラスではできるかどうか…。しかしいつかやってみたくて私自身は思っている。

#### 14. 担当者の悩みと課題

‘英語選択 LL (初級)’は 3 クラスとも、4 月の新学期には定員いっぱいの 64 名でスタートする。と聞いて驚かれない方はまずいない。担当者本人は毎年のことですっかり感覚が麻痺してしまったが。しかし私を悩ませているのは実はこの人数ではない。先ほどちょっと触れた様に、このクラスでは履修者 1 人 1 人の学力、それ以上に目的意識や意欲の差があまりに大きいのだ。その差は必修クラスにおける差の比ではない。その為、どのあたりに基準を合わせていいのか常に迷っている。どこに合わせてもそこ以外からは不満が出る。学生それぞれが密かに不満を募らせているのでは、と彼らが直接それを口にしないだけに気にかかる。勢いかなり強引に、一方的に授業を進めざるをえず、そうなると当初望んだ方向とはかけ離れてしまい、担当者のフラストレーションはますますたまっていく。

先ず内容を聞き取る‘聞き取り’だが、授業中学生はスクリーンとモニターに流れる画面を見ながらせりふを録音し、直後に録音を確認する意味もあって、各自それを再生して聞いている。しかし実際にその内容を理解するのは私が口頭で再現した、学生に合わせてスピードを落とし、必要であれば言いかえもする、そのせりふを通してである。これはとりあえず内容をつかませる為の字幕の代わりであって、これができたら改めて録音したオリジナル音声を聞かなければ全く意味がない。逆に言えばそうすること

が決まっていて初めてとれる方法である。だから授業を終える時は学生に、MD／カセットは持ち帰ったら内容が頭に残っているうちに何回も聞き返す様言っている。期末試験になれば‘聞き取り’の問題は全てオリジナル音声で出されるが、私の言うことをちゃんと実行している学生はほぼ完璧にできるし、表面に出る点数以上の力がついていると思う。だがこれを実行していない学生は、試験直前になってまとめて聞こうとするものだから、1 学期分はかなりの量だし、その頃には内容を忘れてしまっていて、結局試験では惨憺たる点数を取る。これは本人の責任と言ってしまえばそれまでだが、担当者としては学生が指示通りに毎回録音したオリジナル音声を聞き返しているかどうか、チェックすべきとも思う。たとえば翌週にクイズをする、など。しかし実際には授業中にこれ以上の時間的余裕はないし、いちいちチェックされなくても復習している学生は、それより早く次へ進んでほしいのだ。

音を聞き取る‘書き取り’にも全く同じことが言える。‘書き取り’の場合は私が口頭で再現することはなく、学生はいきなりオリジナル音声を録音し、書き起こし、訂正して提出する。それを返却する時に私は言う。‘これはなるべく清書し、それができたら清書のせりふを目で追いながら音声を聞き、それができたら音声だけを流して清書通りに書き起こせるかどうかやってみること。’この‘書き取り’はそのまま期末試験の問題になる、という点が学生にとっては逆に落とし穴になるらしい。‘1 度宿題でやったところだから今度はちゃんと書けるだろう。現に清書を見ながら音声を聞いていると、この程度ならすぐにできそうだ’と既に書けた気になってしまう。

ところが実際に白紙を 1 枚目の前に置いて音声を流し、さあ書き取ろうとすると、しかも宿題とは違って今度は試験だからスプリングも全て正しくしようとする、これがなかなか大変なのだ。ふだん私の言うことを聞

いている学生は、これに気づいていて早めに試験勉強を始めるから問題ない。だが試験直前に勉強を始めた学生は、その時初めて事の重大さに気づいても既に間に合わず、時間切れの状態を受験するので、結果は悲惨だ。これも‘聞き取り’と同様本人の責任に違いないのだが、担当者としてはそうなる前に復習を怠っていないかチェックすべきとも思う。

こうした一部の学生はしかし、自分のいわば怠け心で試験で点数が取れない、あるいはその結果単位が取れないのだから仕方がない、とあきらめをつく。ところが担当者が心を痛めるのは次のような学生で、1 クラスに毎年何人かいる。つまり、中学高校時代英語は得意ではなかったが、大学ではぜひリスニングをやりたくてこの授業をとった。もともと映画は好きだから、今度こそやれるかもしれない。だがやはりついていくのは大変で、前期試験もひどい出来だった。やめてしまおうかと思ったが、ここであきらめては元へ戻ってしまう、と後期は全出席で通した。勿論‘書き取り’の宿題も提出した。後期試験では前期と同じ失敗をしない様、がんばった。——私は授業中の本人をずっと見ていたから、彼／彼女の後期試験のがんばりが採点していてよくわかるのだ。しかしそのがんばりが点数に結びつかない。怠けているのではなく、理解の仕方が中途半端で、ポイントをことごとくはずしてしまう。結局は出席点や平常点などを上限まで加えても合格ラインに達せず、‘D’ にせざるを得ない。これも‘どのクラスでもそうだ’という声が一斉に聞こえてきそうだが、担当者としてはこの授業では、こういう学生にこそ焦点を合わせるべきかとも悩む。

一方‘聞き取り’も‘書き取り’も、こちらがいちいち確認しなくても怠りなく復習する学生のことを考えると、彼らにはぜひ前に述べた、これまでこのクラスでは実現できないでいる‘書き取り’の第4段階、つまり‘書き取り’部分をモデルにした発音練習やシャドウイングに挑戦させたい。毎年このクラスには‘AA’にもう1つ‘A’をプラスしたい様な学生が必ず複

数いて、彼らが自分の力を持てあまして欲求不満になっているのではないか、あるいは自分の力が余っていることにも気づかせてやれていないのでは、と本人達に声をかけたくなることも何度かあるが、そのたびに思いとどまっている。

実は 2003 年度にドラマクラスができた際、私はひそかにこの 3 つ目のクラスに上記のような学生を集められないかと思い、講義要項に‘映画クラスとは違い、こちらは人数を少なめにして行います’と書いてみた。結局はいつもどおり履修希望者が定員を超えたので実現しなかったが、今はそれでよかったと思っている。このクラスは全学部、全学年、全クラスにオープンしている。担当者があまりの玉石混交ぶりに頭をかかえることもあるが、その玉石混交こそがこのクラスの特長であり、担当者も学生も共に貴重な体験をしている。だから何かうまくいかないことがあるとすれば、それはこの状況の中で解決すべきであり、玉と石を分けてしまえばこのクラスの存在意義はない。

**資料 1.** ご参考までに 2003 年度前期映画クラスの‘書き取り’の一部を以下に挙げる。(宿題で全文書き起こす。翌週授業中に訂正して提出。こちらはチェックした上で返却する)。

Snowman: You wanna go to the village? Okay. Rule No.1 out here. Always.  
No. Never go out in a blizzard.

Sulley: We need to get to Boo.

Mike: Boo? What about us? Ever since that kid came in, you've ignored everything I've ever said. And now look where we are. Oh, we were about to break the record, Sulley. We would have had it



made.

Sulley: None of that matters now.

Mike: None of it matters... Wait a second. None of it matters? Okay. That's... No. Good. Great. So now the truth comes out, doesn't it?

Snowman: Oh, would you look at that? We're out of snowcones. Let me... just go out and make some more.

Mike: Sulley, what about everything we ever worked for? Does that matter? Huh? And what about Celia? I'm never, never going to see her again. Doesn't that matter? What about me? I'm your pal. I'm your best friend. Don't I matter?

Sulley: I'm sorry, Mike. I'm sorry we're stuck out here. I didn't mean for this to happen. But Boo's in trouble. I think there might be a way to save her if we can just get down to that...

Mike: 'We?' Whoa, whoa... No. There's no 'we' this time, pal. If you want to go there and freeze to death, you be my guest, because you are on your own.

*(Monsters Inc.)*

資料 2. 続いて以下は 2003 年度後期ドラマクラスの '書き取り' の一部である。

Barbara Cooker: I realize that news shows need to be arresting, exotic and even sexy. And it always helps to have a pretty face up there. But that still doesn't make it right to fire a person whose job performance is beyond reproach simply because her face begins to show a wrinkle or two.

Jack Billings: But why not? What if they interviewed for this job and they

said, 'Sorry, we were looking for someone younger.' Would that be okay?

Barbara: Yes.

Jack: So they can hire based on youth, but they can't fire based on lack of youth?

Barbara: That's right.

Jack: Where's the distinction?

Barbara: Well, the distinction is that if someone already has a job and they are doing it well, you shouldn't be able to fire them because of old age. That's ageism.

Jack: Ah, here's a picture of you when they hired you. Isn't it possible that part of the criteria was this pretty face and this youthful appearance? Couldn't that have been a part of what the station was looking for, Ms. Cooker?

Barbara: Yes.

Jack: In fact the woman you replaced, she was older, wasn't she?

Barbara: Yes.

(*Ally McBeal*, First Season, Episode 3 "The Kiss")

### 資料 3. 2004 年度講義要項 (映画クラス)

英語選択 LL (初級) —映画でリスニング—

#### 授業の内容と計画

映画を教材に、リスニングのトレーニングをしましょう。授業では字幕もついていない、吹き替えられてもいない映画のワンシーンが、いきなりシャワーの様に皆さんに浴びせられます。登場人物がしゃべっているのは確かに今まで習ってきた英語のはずなのに、それは‘ことば’としては聞こえてこな

い。ただ‘雑音’が耳のそばを通り過ぎていくだけ。そんな中にぼんと放り込まれる。これが皆さんの出発点です。そしてこの授業の目的は、何だかわからない‘音’を意味を持つ‘ことば’として聞き取る為に使うのは、決して耳だけではないこと。目も頭も心も、リスニングとはそれらを総動員させて行う全身運動であることを発見し、実際に体験することです。さらについて、映画そのものも楽しんでしましましょう。

### 授業の方法

聞き取りの際、最初に皆さんの強い味方になってくれるのが‘目’です。スクリーンに、あるシーンが流れます。場所は？ これは誰？ 何をしている？ どんな様子？ 画面をよく見て、その場の雰囲気やストーリーが動いている方向をつかんで下さい。

この前準備を経て、せりふ自体の聞き取りに入ります。今見たシーンの中から、難しい単語や語句をボードに書き出して意味を確認。その上でせりふは英語のまま、ただしスピードを落とし、わかりにくい部分はやさしく言い換えてこちらで口頭で再現しますので、皆さんはこの段階で内容を理解できるはず。さらに理解できたシーンは録音し、その一部を書き起こしてもらいます。これは単語のつづりや文法の勉強になると共に、録音されたせりふを何回も聞くことにより、英語の発音やイントネーションを自分の耳に覚えさせてほしいからです。ここではひたすら‘耳’を使います。

ストーリーが進むにつれて重要になってくるのが皆さんの記憶力、それに基づいた想像力や推理力です。前のシーンで見たこと聞いたことは、目と耳にしっかり記憶させて下さい。それができていれば現在のシーンが推測できるばかりでなく、これからのシーンも予測できてしまいます。目にする小道具ひとつが手がかりになります。耳に入ってきた単語がいくつかあれば、それらをつなぎ合わせて下さい。これで大体の見当がつかます。この間‘頭’は休むことなくフル回転です。

さてこの頃から増えていくのが‘彼はどうしてこう言ったの？’‘彼女はこれを聞いてどう思った？’という皆さんへの質問です。これは登場人物の気持ちを推し量ることが、そのせりふを聞き取る早道だからです。その人の気持

ちになってしまえば、せりふは既に半分以上聞き取れています。皆さんの 20 年前後の人生経験をすべてつぎ込んで彼、彼女の‘心’を理解して下さい。

それは同時に、映画そのものを楽しむことにもつながります。楽しむ為には、表面的に英語の解釈だけしていても何の意味也没有せん。その人は自分のせりふにどんな思いを込めたのか。それは相手にはどう伝わったのか。せりふによって表現された思いを、表現できなかった思いとも合わせ、目と耳、プラス心で聞いてみましょう。皆さんの持っている感覚を全開にして、授業にのぞんでほしいと思います。前期後期 1 本ずつの作品を毎週見ていきますが、ラストシーンはストーリーの結末に、生のせりふに、そしてそのせりふを自分が聞き取れたことに感動して下さい。

#### **成績評価の方法**

前期試験、後期試験、出席点、平常点、宿題などの総合評価です。

#### **履修者への要望**

教材は全て教室で録音するので、毎回必ず出席すること。録音したカセット/MD は持ち帰った後、内容を忘れないうちに聞き返すこと。この積み重ねがないと上達はしません。また授業が始まるとドアをロックします。遅刻は認められません。

#### **資料 4. 2004 年度講義要項 (ドラマクラス)**

英語選択 LL (初級) —テレビドラマでリスニング—

#### **授業の内容と計画**

テレビドラマを教材に、リスニングのトレーニングをしましょう。授業の目標や進め方は映画クラスと同じですので、そちらを参照して下さい。前期後期 1 本ずつアメリカで、勿論日本でもヒットしたドラマシリーズを取り上げます。主役は共に女性ですが、30 年という時間を隔てた 2 人のアメリカ女性の姿を比べてみても興味あることでしょう。

#### **授業の方法**

先ず前期は 1960 年代にアメリカで 8 年続いた *Bewitched* (日本語タイトル‘奥さまは魔女’)。日本でも 30 年以上前に初めて放映されて以来リバイバル

を繰り返し、今年になってストーリーを日本に置き換えた日本版が登場。相変わらず根強い人気を保っています。この人気は主人公の魔女、サマンサの明るく、健康的な雰囲気によるところが大きいのでしょう。会社員の夫ダーリン（人間）が仕事で危機に陥ると得意の魔法で彼を助け、母エンドーラ（魔女）のモーレッツな婿いじめからは全力で彼を守り、どんな場合でも家族と家庭を最優先させるサマンサは、60年代にそうであった様に現代でも理想の妻であり、魅力あふれる女性に違いありません。また彼女が話すはきはきしたアメリカンイングリッシュは、スピードは多少速いものの発音が明瞭で、ぜひ私達もお手本にしたいと思います。

一方後期はアメリカで、少し遅れて日本でも1990年代後半から2000年代前半にかけて5年間放映された *Ally McBeal*（日本語タイトル‘アリー・マイ・ラブ’）。主人公アリーはサマンサと違ってシングル。ハーバードロースクール出身の弁護士です。このシリーズの見どころのひとつは法廷のシーンでしょう。証人が証言中にふと漏らした小さな矛盾点を決して見逃さず、そこから鋭く攻め込んでいく弁護士のあざやかなテクニック。陪審員に向かってやさしい言葉を選び、わかりやすい論理を用いながら語りかける際の圧倒的な説得力。これらは私達日本人も見習いたいところが少なくありません。そしてこのシリーズのもうひとつの人気は、法廷では颯爽とした姿を見せる弁護士も、私生活ではごく普通の人間であること。主人公アリーも失恋しては落ち込み、新しいボーイフレンドができては舞い上がり、仕事も私生活も忙しい、まさに現代女性そのものなのです。

### 成績評価の方法

前期試験、後期試験、出席点、平常点、宿題などの総合評価です。

### 履修者への要望

教材は全て教室で録音するので、毎回必ず出席すること。録音したカセット/MDは持ち帰った後、内容を忘れないうちに聞き返すこと。この積み重ねがないと上達はしません。また授業が始まるとドアをロックします。遅刻は認められません。

### 参考文献

- 河野護『Hearingにおける映像の役割：映像の機能に関する実験報告』, 「外国語としての英語の Hearing 能力形成要因の実証的研究 (II)」, 1979.
- Loader, Ned. “Notes on the Use of DVD Film in English as a Foreign Language at University Level”, 「外国語教育論集第 24 号」, 筑波大学外国語センター, 2002.
- 根間弘海『シャドーイングと逐次通訳：その実践報告』, 「専修大学外国語教育論集第 27 号」, 専修大学 LL 研究室, 1999.
- Suzuki, Junko. “The Effects of Pictures on English Listening Comprehension: Focusing on the Amount of Contextual Information”, 「和洋英文学第 27 号」, 和洋女子短期大学英文学会, 1996.
- 鳥飼玖美子・進藤久美子「大学英語教育の改革：東洋英和女学院大学の試み」, 三修社, 1996.